

世界の主要建機メーカーの動向

岡本直樹

海外の主要建機メーカーの動向として、近年の世界シェアランキングを調べ、それらの企業を国別に分け、**米国**：CAT・Deere・Terex・I-R 他、**日本**：コマツ・日立建機・タダノ、**中国**：除工集団・中聯重科・三一重工・柳工、**スウェーデン**：Volvo・Sandvik・Atlas Copco、**ドイツ**：Liebherr 他、**英国**：JCB 他、**イタリア**：CNH、**フィンランド**：Metso 他、**韓国**：HD 現代インフラコア、**旧ソ連圏**：BelAZ・ChTZ・UZTM-KARTEX の順に動向を示す。

キーワード：建設機械、アライアンス

1. はじめに

世界の建設機械メーカーは、合従連衡による再編と市場変化に晒されているが、近年の世界シェアの動向を調べると、既知の欧米企業に加えて新興の中国企業の台頭が目覚ましく、韓国の斗山インフラコアの動向も気になる場所である。近年のベスト10入り企業と20位くらいまでの企業をリストアップし、その他に知名度の高い企業等の動向も付け加える。

のランキング変化を示すと表-1のようになる。調査団体によってデータの取り方が違い順位も若干違ってくるので、2010～2023年の同一団体（Yellow Table）の調査結果を並べてみた。年表示は資料発表年なので前年の実績と思われるが、近年の順位変化の

2. 世界の上位建機メーカー

図-1に建機メーカーの2021年の世界シェアのグラフ（DealLabの資料）を示す。前年資料と比較すると2位以下が追いついて、キャタピラーのシェアが28%から20%へと低下して差が接近している。2010年来



図-1 建機メーカーの世界シェア

表-1 建機メーカーのランキング

2004	順位	2010	2012	2014	2016	2018	2020	2022	2023
CAT	1	CAT							
コマツ	2	コマツ							
Terex	3	日立建機	Volvo	Volvo	Terex	日立建機	Deere	除工集団	除工集団
Deere	4	Liebherr	日立建機	日立建機	日立建機	Volvo	除工集団	三一重工	Deere
日立建機	5	Volvo	Liebherr	Liebherr	Liebherr	Liebherr	三一重工	Deere	三一重工
Liebherr	6	Sandvik	三一重工	Terex	Volvo	除工集団	Volvo	Volvo	Volvo
Volvo	7	Terex	中連重科	中連重科	Deere	斗山インコア	日立建機	中連重科	Liebherr
CNH	8	Atlas	Terex	三一重工	斗山インコア	三一重工	Liebherr	Liebherr	日立建機
I-R	9	Metso	斗山インコア	Deere	除工集団	Deere	斗山インコア	日立建機	Sandvik
JCB	10	除工集団	Deere	斗山インコア	JCB	JCB	中連重科	Sandvik	JCB

傾向を掴んで欲しい。中国企業の台頭が著しい。参考に2004年の日本建設機械工業会の資料も左端に添付した。この年の番外11～16位にコベルコ建機・斗山・Atls Copco・タダノ・現代重工・住友建機が続いていた。2023年の番外11～20位には、斗山 Bobcat・中聯重科・Metso・Epiroc・Terex・JLG・柳工・クボタ・現代斗山インフラコア・CNHが続いている。

3. 主要メーカーの動向

ランキング上位メーカーの動向を国別に示すと同時に、消滅した企業を含む高名なメーカーの消息も追記した。

(1) USA

(a) Caterpillar

Caterpillar は1925年に設立された世界最大の米国の建機メーカーである。CATの愛称とキャタピラーイエローが特徴で、設計・冶金技術等の品質に絶大なる信頼がある。伝統的に買収により取扱機種を拡げ、それらの後発機種でも品質向上によりシェアを確実に拡大してきた。古くはグレーダのRussel等を手始めに、近年ではTerexの鉱山部門(O&K, Unir Rig等)を取り込んだBucyrusを買収し、鉱山用積込機(写真一1, 2), DT, ドリル等を戦列に加え鉱山部門を強化した。



写真一1 CAT 7495



写真一2 CAT 6060

(b) Deere

Deere and Company は、1837年創業の米国を代表する世界最大級の農機系メーカーで、グリーンのトラクタとJohn Deereの愛称で親しまれている老舗である。1,000 ha以上の農場向けの500HPトラクタでは他社の追随を許していない。ブルドーザ等の建設機械はイエローカラーである。

(c) Terex

Terex Corporation は、旧GMの建機・特殊車両部門として生まれて、1974年開発の世界最大350 Ton ダンプ Titan33-19で名を馳せた。

1988年にUnit Rigを、1997年にはO&Kも買収してマイニング部門を強化していたが、同部門は2010

年にBucyrusに移動した。そして、2016年にフィンランドのKonecranesにマテリアルハンドリング事業を売却し、独Demagクレーン事業を2019年にタダノに売却した。

写真一3は最後のモータスクレーパ開発となったリアエンジンHST駆動のTHS15, 写真一4はMINExpo2008に出展した400 Ton (360 t) ダンプのMT6300である。



写真一3 THS15



写真一4 TEREX MT6300

(d) Ingersoll Rand

インガソルランド(I-R)は穿孔機メーカーとして1871年に創業、1905年にランドドリル社と合併、戦後はわが国でも大口径ブラストホールドリルT-4, DM-4, DMM等がよく知られていた。東京流機やMontabertを買収したが、2004年にドリル部門をAtlas Copcoに売却した。大型振動ローラSP60やSP54等はわが国のロックフィルダムの標準的振動ローラであった。舗装機械のABGは1990年に買収していたが、これらの道路部門も2007年にVolvo CEに売却され、現在は建機メーカーの面影はない。

(e) Link-belt

Link-beltの社名は、祖業の取外し可能なフラットチェーンベルトのリンク機構(1874年に特許取得)に由来している。その後、クラムシェルや油圧ショベルの会社となり、1967年から買収されたFMC傘下でLink-Belt機を世界に販売、油圧ショベルも導入した。

また、1963年から住友機械工業に技術供与し、機械式ケーブルショベルとトラッククレーンを製造販売、1967年に油圧ショベルを追加した。昔付いていた機体後部の住友=Link-beltブランドが懐かしい。

1986年になるとFMCと住友重機械工業の合併でLink-Belt建機を設立、住友建機も親から分社化した。1998年には掘削機ラインを分離して、LBX Co(住友建機+Caseの合併)を設立、2010年に住友建機が完全子会社とし、現在はLBX(Link-Beltブランド)にOEM供給している。現在のLink-Belt Cranesは、ケンタッキー州レキシントンに本社を置く、住友重機械工業の完全子会社である。

(f) Manitowoc

マニトワックは1902年に設立された米国に本拠を置くクレーン大手で、Grove・Manitowoc・National Crane・Potain・Shuttleliftのブランド名でクローラクレーン及びブームトラックを製造販売している。

(g) Allis-Chalmers

1901年に合弁会社として設立、そのブランドは主に農機具事業のオレンジ色のトラクタによって名声を博し、多様な建設機械に発展した。しかし、1950年代からライバルとの競合から採算が悪化し、1974年にFiat資本を入れてFiat-Allis建機を設立した。1983年にはFiatallisと改名、1985年に北米工場を閉鎖してこの合弁事業を終了した。

砕石機械メーカーとしても有名であったが、1980年代～1990年代の一連の会社売却により会社は変容し、最終的には解散した。

(h) Vermeer

1948年創業、農機具、トレンチャ、水平ドリルを製作販売、わが国へは岩盤トレンチャで知られる。

(i) その他

その他のメーカーにJLG・Astec Industries・Altec Industries・Gehl・Elliott・Mack・Scoopmobile・Warnear & Swasey (Gradall)・Yale等があり、消滅した主要なメーカーやブランドの推移は以下のようになる(図-2)。

Marion → Bucyrus → CAT

International Harvester → コマツ

LeTourneau → P&H → JOY → コマツ

LeT-Westinghouse/Wabco → Dresser → コマツ

Euclid (Michigan) → VME → 日立建機

Koehring → AMCA → Northwest → Terex

(2) 日本

(a) コマツ

日本のトップメーカーであるが、CATの日本上陸時にその危機感から、TQCを強力に推進して品質を向上させた。早くから海外志向が強かったが、これにより世界進出への基盤を強固にした。アライアンスでも技術提携からM&Aへと進め、IH、DRESSER(WABCO系：写真-5)、DEMAG等を取込み、近頃では鉱山機械大手のJOYを買収して、地下と露天掘り機械(P&H等：写真-6)を強化した。ITにも古くから力を入れKOMTRAX、AHS、スマコン等からDXへと推し進め、海外へも展開している。ADTではノルウェーのMoskyからOEM供給されていたが、現在では自社開発機に切替えている。



写真-5 980E

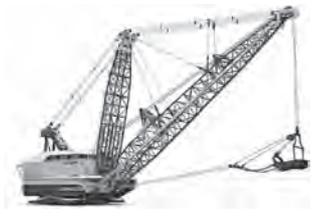


写真-6 P&H 9020C

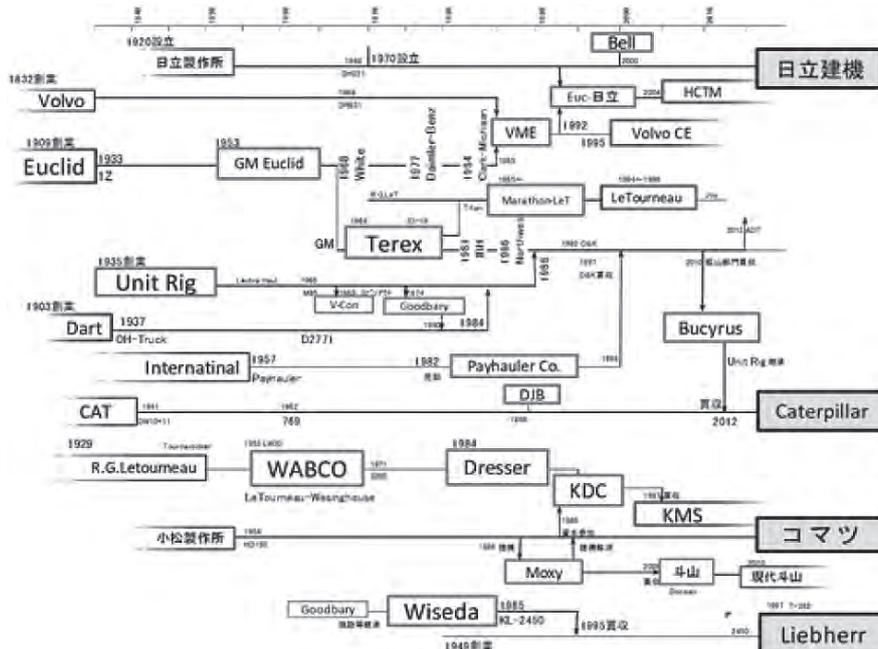


図-2 OHトラックメーカーのアライアンス変遷

(b) 日立建機

1970年に日立製作所から分社、定評ある油圧ショベルを海外にも展開し、海外マイニング市場には、買収したEuclidを投入して、積込・運搬の両輪を揃えた。国産化も進めているが出遅れたAHS(写真一7)の挽回が課題である。ADTでは、南アのBell社のOEM供給(写真一8)を受けていた時期もあった。現在、79社ある連結子会社のうち72社が海外にあり、22年度の売上収益の82%は海外売上である。また、情報化のSolution Linkageでは、買収したWENCO社のFMSを海外の露天掘鉱山で運用し、国内ではICT施工、機械保全のConSiteを展開していて、油圧ショベルの自律化にも長期計画で取組んでいる。



写真一7 EH5000



写真一8 AH400

(c) タダノ

1948年に多田野鉄工所を高松で創立、1955年に初の油圧トラッククレーンを開発し、1989年に社名をタダノに変更した。日本を代表するクレーンメーカーとなり、オールテレーンクレーン(写真一9)やラフテレーンクレーン(写真一10)等に強みを持つ。1990年にFAUNのクレーン部門を買収して、2012年にTadano Faunとした。また、大型クレーンの強化では、米建機大手Terexから、欧州に強いDemagブランドのクレーン事業を2019年に買収している。

その他にコベルコ建機・住友建機・クボタが20位内に入っている。



写真一9 AR7000N



写真一10 GR160N

(3) 中国

(a) 徐工集団/XCMG

XCMGは1989年に設立された新興総合建機メーカーであるが、近年、中国トップ企業となっている。前身の華興製鉄所は1943年に生まれ、1957年のタワークレーン製造から建設機械業界に参入した。2012年になるとコンクリート機の独SCHWINGを買収している。そして、驚くべきことは、超大型のマイニング用700t級ローディングショベル(写真一11)や360t積OH-DT(写真一12)を生産しているのである。更に2020年には400t積DTのXDE440を発表した。



写真一11 XE7000



写真一12 XDE400

(b) 中聯重科/Zoomlion

Zoomlionは、1992年に設立された湖南省系の建機大手である。コンクリートポンプ、ミキサ車といったコンクリート用機械とクレーンに強みを持っている。2008年にイタリアのコンクリート機器メーカーであるCIFA(シーバ)を買収し、世界展開を加速している。

(c) 三一重工/Shantui (SANY)

中国長沙に本拠を置く大手建機メーカーである。同社は福島原発事故の際、62mブームのコンクリートポンプ車を原子炉冷却の放水(写真一13)に提供して有名となったが、独コンクリートポンプ大手のPutzmeisterも買収している。著者は17年前に旧ソ連圏の国で、古いソ連製に置き換わるShantui製ブルドーザ(写真一14)を各所で見掛けた。中国国内ではコマツやCATと競っている。



写真一13 原発の冷却放水



写真一14 Shantui

(d) 柳工/Liugong

柳州に本社を置く1958年設立の多国籍建機メーカーで、ホイールローダを手始めに幅広く汎用機を提供していて、ローダは 5.4 m^3 、BDは36t、DTは91tが最大で、HEは120t級までである。最近ランクアップしてきた。

(4) スウェーデン

(a) Volvo CE

1950年にVolvoが前身のBolinder-Munktell (BM)を買収、ローダH10を開発し、1966年に全駆のDR631を発表して今日のADTを定義した。1973年に社名をVolvo BM ABに変更、1985年にはEuclid系Clark-Michiganと統合してVMEグループを形成したが、1992年にEuclidは日立と提携して離脱、残ったVMEは1995年にVolvoが完全子会社化して、社名をVolvo CEとした。建機の総合強化では1991年にAKERMAN (油圧ショベル等)を傘下に収めていたが、米Champion (モーターグレーダ)も1997年に買収して、翌年には韓サムスの建設部門を買収、2007年に米Ingersoll Rand 道路部門を買収して舗装機とローラを強化した。そして、舗装機のBlaw Knox 部門は2020年に手放して整理した。

ボルボ建機は、ボルボグループ (AB Volvo) の傘下で、グループはスウェーデンに本拠を置くトラック・建機メーカーである。1928年にトラックメーカーとして設立され、現在もトラックの売上がグループ全体の6割超を占める世界2位のトラックメーカーである。乗用車事業は1999年にFordに売却、2010年に中国/浙江吉利控股集团傘下に移動した。日本国内では、日本法人が日産ディーゼル工業を買収してUDトラックとしたが、現在はいすゞ傘下となっている。

近年は電動化と自律化に力を入れていて、バッテリー駆動のキャブレス15tDT (TA15: 写真—15) によるフリート運転サービスを提供しているが、TA15は2020年のRed Dot Awardを受賞した。また、2021年に自律ホイールローダLX03 (写真—16)を開発、2022年には初の燃料電池ADTのHX04 (写真—17)



写真—15 自律DT



写真—16 自律ローダ



写真—17 燃料電池ADT



写真—18 電池駆動23tBH

と電池駆動23tバックホウEC230 (写真—18)を発表している。

(b) Sandvik

1862年創業のロックドリルと地下用ローダ、トラック等の製造メーカーである。SANDVIKブランドは1876年に米国で使用を開始し、1972年に社名とした。1998年にフィンランドのTamrockを買収している。

(c) Atlas Copco → Epiroc

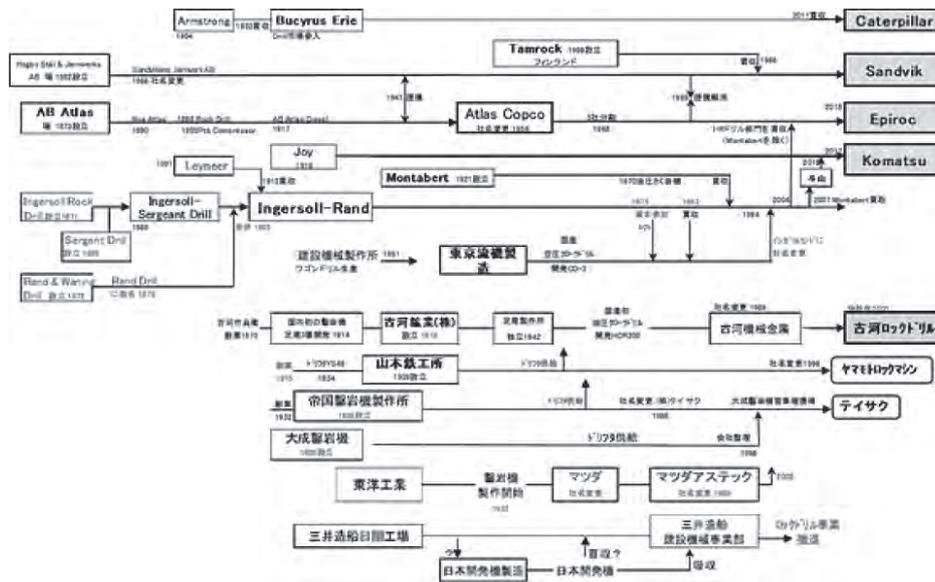
Atlas Copcoは1873年に設立されたストックホルムに本社を置く多国籍企業で、世界約20ヶ国、80の製造施設で生産を行い、180ヶ国以上の市場で事業展開をしている。設立時の社名はAB Atlasであったが、1956年に買収したベルギーのコンプレッサ会社の頭文字Copcoを社名に付け加えた。1973年に油圧ドリルを発表、1980年に日本ロックエンジニアリングが初輸入して、その性能に国内ドリルメーカー等は驚愕した。2004年に米I-Rのロックドリル部門を買収、ドリルメーカーの再編が大きく進む (図—3)。2014年に土木鉱山事業部門をEpirocとして分社化した。

その他に有名な振動ローラのDynapacがあるが、2007年にAtlas Copcoに加わり、2017年には仏Fayat Groupに買収された。その他のメーカーには、Akerman・Kockums・Landsverk等がある。

(5) ドイツ

(a) Liebherr

Liebherrは、わが国では大型クレーン (写真—19) で有名であるが、欧州を代表する総合建機メーカーとなっている。グループはドイツの建設機械メーカーを母体とした企業体で、スイスのLiebherr-Internationalを持ち株会社とした未上場の同族経営である。世界12ヶ国に生産・販売網を展開し、グループの従業員数は3万3,000人に達する。中心となるリープヘル社は、Hans Liebherrによって1949年に創業された。Hansは南ドイツで両親の建設会社において、1949年に簡単に輸送・設置ができる最初の移動式タワークレーンTK10を開発して評判を得た。後継モデルのクレーン生産が増大するにつれ、リープヘル社は施工会社



図一三 発破用穿孔機メーカーのアライアンス

から建機メーカーへと変貌する。1953年に初の油圧ショベルを開発してから、現在の総合建機メーカーへと発展した。超大型の800t級マイニングショベル（写真一20）と360tのOH-DT（写真一21）を生産する数少ないメーカーでもある。OH-DT部門は米Wisedaを買収して戦列化した。2016年には70t級HSTブルドーザ（写真一22）を上市している。

(b) Wirtgen Group

グループのブランドは、サーフェスマイナー（写真一23）のWIRTGEN、舗装機械のVÖGELEは1836年設立、ローラのHAMM、モバイルクラッシュャのKLEEMANNで構成されている。

(c) BOMAG

1957年設立、1962年に傑作機7t振動ローラBW200を開発、日本でも高速道路工事やRCDの定番機械となる。1970年に米Koehringに買収された

が、2004年に仏Fayat Groupの傘下となった。

(d) O&K

O&K (Orenstein & Koppel) は、1876年設立の鉄道車両・重機等を専門とする大企業である。O&KのSLは日本の鉄道ファンにはコッペルとして愛されていた。大戦後は1949年に西ドイツで操業を再開、翌年にLubeck Crane社と合併し、掘削機の製造事業を他の機種へと拡大した。1961年から油圧ショベルに注力し、1967年には3m³ローディングショベルRH15が開発され、日本にも輸入されて活躍した。1972年には西ベルリンの5工場を稼働させ、着実に成長していた。1997年には世界最大の800t級マイニングショベル（写真一24）を開発し、超大型ショベルのベンチマークとなった。

鉄道事業は1981年に撤退し、マイニング部門は1997年にTerexに売却した。建設機械事業も1999年に当時Fiatグループの一部であったNew Holland Constructionに売却された。その後、Terex O&Kは2010年にBucyrusに買収され、翌年にCATイエローに衣替えした（写真一2）。

(e) Menck & Hambrock

Menck & Hambrockは、1868年に設立され、20世紀初頭から、さまざまなケーブル掘削機を開発して



写真一19 3,000tクローラクレーン



写真一20 R9800FS



写真一21 T284



写真一22 PR776



写真一23 Wirtgen 4200SM



写真一24 O&K RH400

名声を博した。1978年の破産の数年前、アメリカの **Koehring** が事業を引継ぎ、杭打部門のみが残って1992年から **Menck GmbH** の名称で運営されている。

(f) Kaelble

1884年創業の建設機械とトラックのメーカーとして欧州では名高く、1939年に欧州最大のブルドーザ PR125を開発している。1941年以降は軍用車両の生産に専念した。戦後はトラクタやトラックの生産を再開したが、1996年に破産、2002年から、**Kaelble** は **TEREX-Kaelble** という名前で **Terex GmbH** の一部門となり、2010年に **Atlas Maschinen GmbH** が **Kaelble** の全株式を引継いだ。

(g) Hanomag

Hanomag は、1835年創業の **Hanomag-Henschel Fahrzeugwerke GmbH** の略称で、SL、トラクタ、軍用車両を生産した。1969年に商用車部門は合併により **Hanomag-Henschel** ブランドとなり、その後メルセデス・ベンツに移管された。

日本との関係では、戦前の豊満ダム（満州）にブルドーザ K50 を輸出しているが、1989年になると小松製作所が **Hanomag AG** に資本参加し、2002年には完全子会社化して、**Komatsu Germany GmbH** とした。

(h) Krupp

クルップは、工業地帯エッセンを地盤とする重工業企業、1999年にティッセン社と合併し、巨大工業コングロマリットのティッセングループとなった。

クルップが1978年に開発した **Bagger 288**（写真—25）は全長220m、全高96m、総重量12,340tの当時世界最大の **BWE** (Bucket Wheel Excavator) であった。2001年にドイツ西部の褐炭露天掘り鉱山・ハンバッハ炭鉱から、22km先のガルトツヴァイラー炭鉱まで3週間かけて移動している。因みに、現在世界最大の **BWE** は **TAKRAF Bagger 293** (14,200t) に譲っている。

(i) Deutz AG

Deutz AG は、4ストローク機関の発明者である **N.A.Otto** が1864年に創設した最古の内燃機関メーカーであるが、トラクタやトラック等も生産していた。



写真—25 Krupp Bagger 288

建設機械のディーゼルエンジンとして **Cummins**, **CAT**, **Detroit** と共によく利用された。日本では、三井ドイツ・ディーゼル・エンジン(株)を1963年に設立、日鋼 **O&K** や **EIMCO** 建機に搭載されていたのが懐かしい。三井ドイツは **Deutz** 資本を離れ、エンジン供給は(株)三井 **E&S** パワーシステムズが継承している。

(j) Lanz

Lanz 社は、**Lanz Bulldog** の名で知られる焼玉エンジントラクタを生産、ブルドッグの顔のような左右に突き出た2つのフライホイールが特徴。1921~1960年間に22万台以上が生産され、戦前の満州や戦後の日本の農場にも輸入された。1956年に **John Deere** が買収し、しばらく生産した。

(k) FAUN

1845年の2社合併により **Fahrzeugfabriken Ansbach und Nuremberg** の略称として **FAUN** が誕生した。1986年に **O&K** に売却され、トラッククレーン部門は1990年に **タダノ** に売却され、2012年に **Tadano Faun GmbH** となった。

その他のメーカーとして **Putzmeister・Bauer・WACKER NEUSON・Sennebogen・Atlas Weyhause・Frisch・Fuchs・Hatra・Kramer・Nobas・Schaeff・Schmiedag・Sennebogen・Weimar・Weserhutte・Zettelmeyer** 等がある。

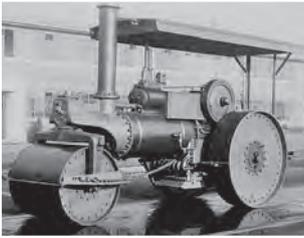
(6) 英国

(a) JCB

JCB といえばバックホウローダで知られているが、1945年に **Joseph Cyril Bamford** が **J.C. Bamford Excavators Ltd** として創業、大戦中のサープラスとスクラップを利用して、農業用被牽引式ダンプの製造から始めた。その後フロントエンドローダを造り、1953年に初のバックホウローダ **MK1** を開発した。1970年には初のリアエンジン **HST** クローラローダを開発している。現在、四大陸に22工場を設置し、750以上のディーラを展開、バックホウローダ生産は2020年に75万台目に達した。近年は電動化、燃料電池車に力を入れ、世界初の水素エンジン建機(バックホウローダ)も2023年に発表した。

(b) Aveling-Barford

1850年創業の **Aveling-Barford** はローラ（写真—26）の老舗で、戦前は英国のロードローラの75%を製造し、わが国にも輸入されていた。戦後は **OH** ダンプトラックやローダ、グレーダ等も生産し、**OH-DT** は日本にも新 **CAT** 三菱が代理店となって平成期に輸入さ



写真一 26 Av-Bfd T 型



写真一 27 RD30

れたことがある(写真一 27)。今世紀に ADT (RXD シリーズ) の権利をシンガポールの ST Kinetics が継承し, TRX Build ブランドで販売している。リジット DT はノルウェーの Moxy が 2007 年に権利継承を図ったが, 翌年に Moxy は韓国の斗山に買収され, 計画は頓挫した。

(c) Ruston-Bucyrus

1857 年に設立されたラストン・プロクター社は蒸気ショベルで名を馳せ, Bucyrus と提携した Ruston-Bucyrus の 1930~1985 年間に英国を代表する企業であったが, 現在は消滅している。

(d) 他メーカー

DJB は, CAT の ADT として D シリーズの生産を担っていたが, 完全買収された。他にクラムシエルの代名詞であった老舗の Priestman, Muir-Hill・Rapier・Vickers 等があった。

(7) イタリア

(a) CNH Industrial

CNH Industrial は, 2013 年に CNH (Case New Holland) global と Fiat Industrial とのグループを経営統合して, 農機系メーカーの Fiat-Allis, New Holland, CASE IH 等の系統をまとめた。大株主は Fiat を創業したアニェッリ家で, ブランドは, New Holland (農機と建機), CASE IH (農機), CASE (建機) を使用している。トラックメーカーの Iveco は 2011 年に分社化された。CNH global は 1999 年の New Holland (NH) と CASE IH の合併結果であり, NH は Fiat-Allis や NH 等を統合して生まれた。そして, CASE IH は CASE による International Harvester 農機部門の買収で 1985 年に誕生している。

(b) Fiat-Allis

Fiat-Allis については, 米 Allis-Chalmers の項で説明

(8) フィンランド

(a) Metso

1999 年に Rauma と Valmet の合併により設立, 2008 年に三菱重工から買収した製紙機械事業をバルメットが

引継ぎ 2013 年に分社して, メッツォは鉱業・砕石プラントなど現在の事業形態に集中する形となっている。

(b) Konecranes

コネクレーンズは, 港湾用搬送機・クレーンメーカーで, エレベータ大手のコネから 1994 年に分社化独立した。2016 年に米国の建機大手 Terex よりマテハン事業を買収し, 2021 年に兄弟会社の荷役機器大手 Cargotec と合併している。

(c) HIAB

HIAB はトラック搭載の油圧ローダークレーンを開発して, 1944 年に Hydrauliska Industri AB (HIAB) を設立し, それ以来, 50 万台以上のローダークレーンを 120 か国以上の顧客に納入している。日本法人もあり, 海外工事で OH ダンプを使う場合には, タイヤ脱着に必須の装置として持参リストに加えた。

(9) 韓国

(a) HD 現代インフラコア

HD Hyundai Infracore Co は, 韓国で最大手の建機メーカーであった斗山インフラコア/Doosan Infracore を 2021 年に現代重工業グループが買収して, 2023 年 3 月に社名も変更した。

斗山インフラコアの前身は, 日本統治下の 1937 年に朝鮮機械工業として発足し, 戦後, 韓国による国有化後, 1963 年にハンコック機械工業として株式会社化され, 69 年に新進グループに売却されたが行き詰まり, 1976 年に大宇産業に売却して社名が大宇重工業となった。1997 年の金融危機の際に大宇は倒産し, 斗山重工業が買収して社名を斗山インフラコアとした。2007 年にホイールローダメーカーの煙台裕華機, 米 Ingersoll Rand から Bobcat, ノルウェーの ADT メーカー Moxy を相次いで買収した(写真一 28)。しかし, その後の景気低迷による流動性危機に直面し, 斗山重工業が保有する斗山インフラ株の売却を決定し, 現代重工グループが 35% を購入した。しかし, 斗山 Bobcat の株 51% は売却に含まれていない。



写真一 28 斗山 Moxy MT31



写真一 29 BELAZ 75710

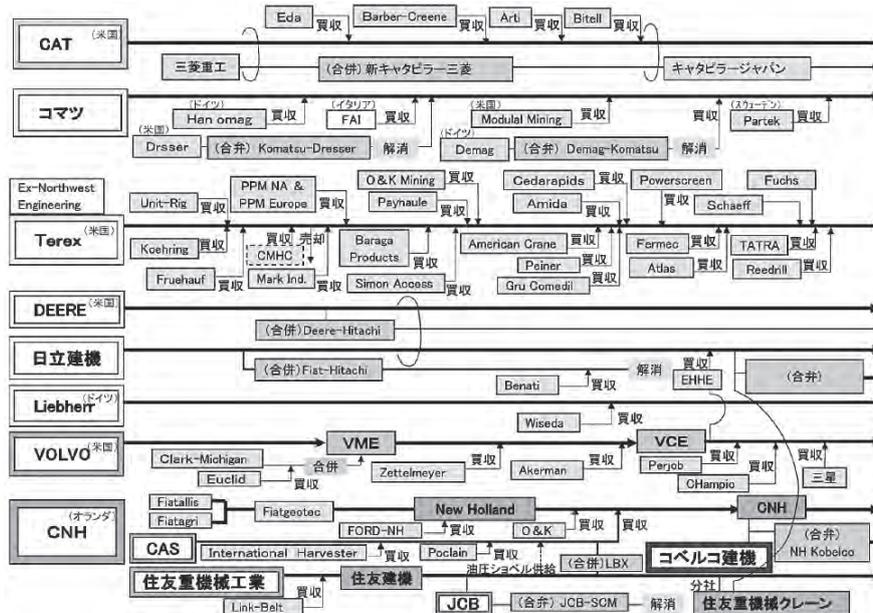


図-4 建機メーカーのアライアンス変遷⁹⁾

(10) 旧ソ連圏

(a) BelAZ

通称のBelAZは、Belorusskii Avtomobilnyi Zavod (ベラルーシ自動車工場)の略称で、ベラルーシのミンスク州ジョジナに本拠を構えるマイニング・ダンプや建設機械等の製造開発を行う企業である。1948年に工場を建設し、1960年代にマイニングトラックの生産を本格化して旧ソ連圏の需要に対応した。ベラルーシとして独立後も大型化を進め、2013年には世界最大の450tDT 75710(写真-29)を開発して、西側OH-DTメーカーを驚かせた。

(b) ChTZ

ChTZは、Chelyabinskii Traktorny Zavodの略称で、ロシアのチェリャビンスクにあるトラクタ工場です。ブルドーザ等を生産している。1933年設立で、1983年の50周年記念に世界最大のブルT-800を開発したこともあった。

(c) UZTM-KARTEX

UZTM/Uralmashplantは、ロシアのエカテリンブルグにあってウォーキングドラグライン等を生産し、IZ-KARTEXがケーブルショベルを生産している。そして、2016年から両社でUZTM-KARTEXグループを形成している。

(11) その他の国々

その他の国々で紹介できなかった著名なメーカーを挙げるとフランスのYumbo・Manitou・Fayat・Haulotte・Poclairn、イタリアのMerlo・Bruneri・Fiat・Fiatallis、

オーストラリアのPalfinger、ノルウェーのMoxy・Broyt、デンマークのHydrema、スイスのAmmann、カナダのSkyjack・Massey Ferguson、南アのBell、インドのBeml等がある。

4. おわりに

世界的に知名度のある企業は他にも多いが、紙幅の都合で近年のシェアランキング上位と、高名なメーカー等に絞って記したが、紹介できなかった企業は残念ながら別の機会に書きたい。

最後に、主要建機メーカーのアライアンスの変遷図(図-4)をやや古いが参考として添付する。

Ton : Shot ton (米トン), t : metric ton

JCMCA

《参考文献》

- 1) Beruhmte Baumaschinen, H-H Cohrs, Podszun, 1999
- 2) Lincoln's Excavator, P. Robinson, Roundoak, 2003
- 3) Haulpak & Lectra Haul, E. C. Orlemann, Icongraf, 2012
- 4) The Aveling Barford Story, B. Elmer, 2017
- 5) 土工機械全史抄, 岡本, JEMCA, 2022.5
- 6) 建設機械のモンスター達, 岡本, JCMCA, 2015.1
- 7) 土工教室 /http://hw001.spaqaq.ne.jp/geomover/
- 8) 各社のWeb情報
- 9) 油圧ショベルの技術の系統化調査, 生田正治, 2015.3

[筆者紹介]
岡本 直樹 (おかもと なおき)
建設機械史研究者